

2017 年度 帰国隊員/青年支援プロジェクト 実施報告書		提出日 2018 年 3 月 17 日
氏名：永谷紫織	実施国：ラオス	調査研究
活動名称	妊婦健診の受診回数と低出生体重児の関連	
実施期間	2017 年 4 月 10 日 ～ 2018 年 3 月 31 日	
(1) 申請した動機		
<p>2015 年、世界では約 270 万人の子どもたちが出生後 28 日を迎える前に命を落とした。5 歳未満の子どもの死亡率が大幅な改善傾向にある中、そのうちを占める新生児死亡の割合は増大傾向にある。中でも、ラオスの新生児死亡率はアジア諸国の中で最も高く、これは昭和 22 年頃の日本と同程度の水準とされる。</p> <p>私が青年海外協力隊の助産師隊員として活動したサラワン県病院では、年間約 1700 人の新しい命が誕生する中でおよそ 5 人に 1 人が出生体重 2500g 未満の低出生体重児であった。小さく生まれる子どもは、新生児仮死や呼吸障害、体温障害、感染症の増悪などを引き起こし、死亡リスクが高い。任期中には、新生児蘇生の講習や人工呼吸機材の支援、産婦人科・小児科間の連携改善など、出生時の状態が悪い子どもの命を救うための活動を実施したが、本当の意味でラオスの子どもや家族を救うためには、根本的な原因にも向き合わなくてはならないのではないかと感じた。中でも、ラオス政府が取り組む妊婦健診の受診との関連を解明することは、生まれてくる子どもたちの健康状態の改善につながり、結果として多くの子どもたちの命を救うことができるのではないかと考え、本研究立案に至った。</p>		
(2) 活動内容概要		
<p>2017 年 8 月にラオスに渡航し、2016 年 8 月から 2017 年 7 月にサラワン県病院で出生した新生児約 1900 名分のデータを収集した。このデータのうち、2500g 未満で出生した新生児を低出生体重児とし、母親の妊娠中の妊婦健診の受診回数や、初回妊婦健診の受診時期と、低出生体重児のリスクにおける関連を調査するため、統計解析を行った。母親の年齢や過去の出産回数、居住地域、健康保険の種類、民族、宗教、早産など、他の要因における偏りが出ないように交絡因子の調整などを行いながら、低出生体重児との関連を調べた。</p> <p>調査対象となった新生児は 1718 名で、このうち低出生体重児は 332 名だった。母親が、妊娠中に妊婦健診を「4 回以上受けた」新生児に比較して、受診回数が少ない母親や受診していない母親の新生児において、低出生体重児のリスクが高かった。また、母親が初回妊婦健診を妊娠初期に受診した新生児に比較して、妊娠中期・後期の受診では、低出生体重のリスクが高いことがわかった。今回の研究結果から、妊婦健診の受診回数の不足や初回受診の遅れが低出生体重児の出生に関連することが示された。妊婦健診の十分な受診回数を保障し、妊娠初期からの健診受診を促すことで、低出生体重児のリスクを減らし、新生児の短期、長期的予後を改善できると考えられた。</p> <p>また、20 歳未満の若い産婦や、初めて出産を経験する母親は、そうでない母親に比較して低出生体重児のリスクが高いこともわかった。このため、コミュニティレベルでの啓発や、学校保健の推進等の教育機関を巻き込んだ分野横断的な介入の推進が必要であることがわかった。調査の結果は、最終報告書として大学院に提出した。また、現地語に翻訳し、ラオス保健省、サラワン県保健局、サラワン県病院に提出して、報告と提言を行った。</p>		

### (3) 活動の成果・苦勞した点・反省点等

ラオスで、妊婦健診と低出生体重児の関連を明らかにした論文はこれまでになく、初めての試みであった。数値として客観的に示すことができた点は本研究の大きな成果であると考えるとともに、同様の評価を現地の関係者よりいただいたことを大変嬉しく感じている。

2017年8月のデータ収集では、久しぶりに訪れる任地で多くの方々が歓迎してくださった。慣れないデータの収集作業で時間がかかる上、さらに電力事情が安定しないために途中でPCの電源が落ちてしまう事態などがあった。また、協力隊として活動していた当時、出産に立会って取り上げた子どもが1歳になっていて、よく懐いてくれた。毎日私の部屋に遊びに来てはデータの入ったPCをおもちゃのように気に入って遊んでいて、データが消えてしまうハプニングもあった。残念な思いもあったが、なにより健やかに成長していることが感慨深い出来事だった。

データを日本に持ち帰ってからの統計解析もまた不慣れな作業であり、多くの時間を費やした。大学院の先生方に支援をしていただきながらなんとかまとめ上げ、高い評価を受けることができた。育てる会のご支援をはじめ、多くの方々にサポートしていただいて成立した活動であった。支援してくださった全ての方に、深く感謝したい。

### (4) 今後のプラン

本調査結果は、論文として海外学術誌に投稿したいと考えており、卒業後も研究員として大学に残って活動を継続する予定である。また、卒業後、2018年4月より公益財団法人日本国際交流センターで正職員として勤務している。勤務内容としては、エイズ・結核・マラリア対策基金（グローバルファンド）とともに活動し、日本国内における三大感染症に対する理解を深めるための活動、例えばシンポジウムの開催などを行っている。また、日米グローバルヘルス対話や、人間の安全保障運営委員会の運営を担い、日本政府としてグローバルヘルスに対する知的、政治的リーダーシップをとっていくための戦略的な取り組みを行っている。今回の調査研究活動を経験値と糧にして、今後も引き続き国際協力に携わっていきたいと考えている。